

## ハイデガーのナチス加担 その学問論的背景

轟 孝夫<sup>1</sup>

### はじめに

俗にハイデガーのナチス加担と呼ばれる出来事は、具体的には 1933 年にナチスが政権を獲得した後、彼がフライブルク大学の学長に就任したことを指している。この時点でナチスに批判的な人物が学長になることはすでに困難だった。しかもハイデガーは学長就任後、鳴り物入りでナチ党に入党しているから、この一件は知識人によるナチスへの支持、ないしは迎合の典型的な事例と見なされるわけである。

ハイデガーがなぜナチスに加担したのかについては、これまで無数の議論がなされてきた。多くの論者は加担の理由を彼の哲学そのもののうちに求めている。つまり彼の哲学のある側面がナチズムのイデオロギーに対して親和性をもつことが、彼のナチス支持を動機づけていたと捉えるのである。もちろん、彼がナチズムを自分の思想とまったく相いれないものと見なしていたならば、ナチスを支持することはなかっただろうから、そうした捉え方は大卒としては誤りではないだろう。しかし問題は、彼がナチズムのいかなる側面に自分の思想との接点を見いだしていたかという点である。

これまでの研究はハイデガーの思索のうちに民族主義的要素を見だし、そこにナチズムとの親和性を見て取るものが多い。「黒いノート」に記されている、いわゆる「反ユダヤ主義的」覚書が人々に知られるようになってからは、反ユダヤ主義という点においてもナチズムとハイデガーの思想的共通性は自明のものと見なされるようになった<sup>2</sup>。またこうした議論とは別に、ハイデガー哲学を特徴づける、日常性を非本来的なものとして否定し、それを「決断」によって転覆しようとする志向が、ナチスのある種の革命的な性格への賛同をもたらしたとするような議論もよく見られるものである。

<sup>1</sup> 轟孝夫（とどろき たかお）。防衛大学校人文社会科学群教授。

<sup>2</sup> 「黒いノート」における反ユダヤ主義的だとされる覚書については、拙著『ハイデガーの超政治——ナチズムとの対決／存在・技術・国家への問い』明石書店、2020年、第2章第2節に私の解釈を示しているので参照されたい。そこで私は、ハイデガーの「ユダヤ的なもの」への言及が、むしろナチスの反ユダヤ主義に対する批判としてなされていることを強調しておいた。

これらの議論はそれぞれもっともらしく見えるが、次のような問題がある。これらは一方でナチズム、他方でハイデガーの哲学が、その思想的 content においてどのようなものかをあらかじめ前提としたうえで、両者を突き合わせ、その共通の要素を探し出すという手続きに基づいている。しかしこうした手続きにおいては、ハイデガー自身がおのれの哲学的立場に基づいて、ナチズムをどのように認識し、またそうした認識に立脚してナチズムに対してどのように関わろうとしたかが度外視されている。彼はこの点について、ナチスに加担していた時期も、その後、ナチスから離反してからも繰り返し語っている。それにもかかわらず、既存の研究ではそうした彼の説明がなぜかほとんど考慮に入れられていない。それどころか逆に、こうしたハイデガー自身の証言は信用できないもの、事実を隠蔽するものとして、無視することが正当化されているのである。

しかし論者が求めているものが、ハイデガーのナチス加担の哲学的動機であるとするれば、彼自身がそれについて包み隠さず語っていることをなぜ無視するのだろうか。その信憑性は吟味が必要だとしても、まずは彼自身がどのような主張をしているかを把握する必要があるはずだ。それにもかかわらず、論者は彼が自身のナチス加担の理由として示していることをまったく取り上げず、わざわざそれとは関係ないところから彼のナチス加担の動機を探し出そうとするのである。

私が本発表において目指しているのは、ハイデガーがなぜナチスに加担したのかを彼自身の証言に即して明らかにすることである。彼自身の戦後の釈明に従えば、彼は大学を改革しようとの抱負をもって学長職を受託した(GA16, 372f.)<sup>3</sup>。そしてこの大学改革は、自身の 1920 年代以来の学問論的思索に立脚したものだ。こうした彼の学問論的立場は当然のことながら、彼の「存在への問い」に根ざしている。本稿ではまず、そうした学問論的立場がどのようなものかを明らかにする。そしてこの学問論的立場に基づいて、彼が大学の現状をどのように捉えていたのかを見ていくことにしたい。

### 「存在への問い」の学問論的含意

ハイデガーの学長就任時の学問論的立場は、すでに 1920 年代にはその下地が形作られていた。彼は 1927 年に刊行された『存在と時間』において、それまでの西洋哲学におい

---

<sup>3</sup> 本稿でのハイデガー全集からの引用箇所は、全集版（Gesamtausgabe=GA）の巻数と頁数を記載することによって表示する。

ではまったく問われなかった新たな問いとして「存在への問い」を提示した。同書は未完に終わったため、「存在の意味」が何であるかは具体的に示されることはなかった。彼が「存在の意味」として明らかにしようとした事柄は、『存在と時間』刊行後の講義で取り上げられている。われわれは彼のそうした仕事の一端を 1928 年夏学期講義『論理学の形而上学的な原初諸根拠——ライプニッツから出発して』に見出すことができる。

ハイデガーは同講義の付論「基礎存在論の理念と機能の特徴づけ」において、「存在者全体」を主題化する学としての「メタ存在論」を導入している（GA26, 202）。このメタ存在論はハイデガーが「存在への問い」によって、究極的にどのような事柄を問題にしようとしていたかを明確に示している。存在者はおのれが存在することにおいて必ずある固有の世界を形成している。存在者が存在するということは、そこにおいてある固有の世界が支配していることと不可分である。したがって、存在者の存在の主題化はわれわれを取り巻く世界、すなわち「存在者全体」の主題化へと必然的に「転換」せざるをえないことになる。つまり「存在者全体」とは、彼が『存在と時間』で「存在」と呼んでいたものを捉えたものである。こうした「存在者全体」を考察する学がメタ存在論と名づけられるのである<sup>4</sup>。

ハイデガーはこうしたメタ存在論を、それが存在者全体を主題化する学であるがゆえに、それぞれ固有の領域をもった既存の諸学とはまったく異なるもの、まさにそうした諸学を「超えたもの」として特徴づけている。メタ存在論という呼称は『ライプニッツ』講義だけでしか用いられないが、1930 年代半ばに至るまで、こうした存在者全体に関わる知は「形而上学」としてつねに取り上げられている。この時期に彼が自身の哲学的企図を形而上学と呼ぶのは、今も述べたように、さまざまな領域に細分化された既存の学問とはまったく異なる性格の知であることを強調するという意図がある。また『存在と時間』の既刊部分が現存在の実存論的分析に終始したために、哲学的人間学として受容されてしまったことを反省し、自身の哲学的な眼目が人間学ではなく、まさに世界そのものを捉えることに置かれていたことを示す趣旨もあっただろう。

---

<sup>4</sup> メタ存在論については、拙著『ハイデガーの超政治』、55 頁以下を参照。

## 大学の現状に対する批判

これまで見てきたように、ハイデガーの「存在への問い」は、存在者のある特定の領域を主題とする既存の実証的学問とはまったく異なる、存在者全体、世界といったものについての知の可能性を示すものだった。つまり彼の「存在への問い」は、学問の本質とは何かという点について、これまでとは異なる見方を示しており、そうした意味で学問論的な含意をもっていた。

そしてハイデガーはこのような学問論的な立場に基づいて、それぞれ固有の領域的学問を取り扱う諸学部が相互に無関係に並存する大学の現状を批判的に捉えている。彼の「存在への問い」は、その学問論的な含意を媒介として、大学論へと展開していくのである。

ハイデガーは 1929 年夏学期講義「大学における勉学への導入」において、大学が知識をモノのように売り買いする百貨店のようになり、専門学校化してしまったことを嘆いている(GA28, 347f.)。ハイデガーはそれに対して、「大学における勉学の本質」を「世界全体の近くに迫ることへの共同体的な衝動」と規定している。先ほどメタ存在論の解釈でも述べたように、ある存在者の存在を捉えることが、その存在者が置かれた世界を捉えることと同義だとすると、「世界全体の近くに迫ること」とは存在へと肉迫することを意味することになるだろう。

大学における学問の現状については、1929 年 7 月のフライブルク大学教授就任講義「形而上学とは何か」でも次のような批判を展開している。

諸学問の領域はお互いにまったく切り離されています。それらの対象の取り扱い方は、根本的に異なっています。学問諸分野のこのようにバラバラの多様性は、今日かろうじて大学と学部の技術的な編制によってひとつにまとめ上げられ、各専門の実用的な目標設定によってひとつの意味を保持しています。これに対して、学問がおのれの本質根拠に根ざすことは絶滅してしまいました。(GA9, 104)

この引用の最後で言及されている学問の「本質根拠」とは、存在、ないしはその存在とともに開示されている存在者全体を指している。大学は専門化、細分化された知を克服し、こうした本質根拠、すなわち「世界全体」へと直接的に迫る知を担うべきだ、こうハイデ

ガーは主張するのである。

これまで見てきたことからわかるように、ハイデガーの 1920 年代の学問論は、大学の現状に対する問題意識と不可分だった。1933 年にハイデガーが大学学長に就任し、大学の刷新を試みるのは、何も突然の思い付きというわけではなく、こうした長い期間の学問論的省察に基づいていたのである。

## ヴェーバー学問論との対決

ここで注意しなければならないのは、こうしたハイデガーの学問論的考察は、ドイツの同時代の学問的論議とは無縁ではないという点である。より具体的に言うと、彼の学問論的立場は、彼より世代がひと回り上のマックス・ヴェーバー(1864-1920)が講演「職業としての学問」(1917 年)で手厳しく批判していたような、当時の学生たちに蔓延していた反主知主義的な気運に棹さしており、それに思想的表現を与えるものとなっている。つまり、ハイデガーの 1920 年代の哲学的思索の展開は、ヴェーバー学問論との対決そのものとして捉えられるのである。

ヴェーバーとハイデガーというドイツの学問界の二大巨頭について、同じ土俵で何か話られることはほとんどない。ヴェーバーに興味をもつ者はハイデガーに興味をもたないし、逆にハイデガーに興味をもつ者はヴェーバーに興味をもたない。またハイデガーが世に知られる前に物故したヴェーバーはいざ知らず、ハイデガーがその仕事の中でヴェーバーに言及することもほとんどない。しかしハイデガーの 1920 年代の思想の歩みは、ヴェーバーの「学問の価値自由」という理念を意識し、それに対抗する学問観を打ち出そうとする試みとして理解することができる。

ヴェーバーは上述の講演「職業としての学問」で、学問は価値から自由なものでなければならず、教壇に立つ教師は政治的に中立であるべきで、それゆえ学生たちも教師に指導者や預言者であることを期待してはならないと説いたのだった。ちょうど同じころ、フライブルク大学で大学教師としてのキャリアを歩み出したハイデガーは、その初期の講義において現代文明のデカダンス、ニヒリズムの洞察に基づいて「事実的生」への還帰を学生たちに求めていた。しかもこうした事実的生への還帰は、ある種の宗教的根源性の獲得という神学的意味を帯びていた。

ヴェーバー学問論との関係で言えば、当時のハイデガーの主要な関心は、ヴェーバーが

「職業としての学問」で喝破した今日の学問の無意味さという事態に対して、学問の意義をいかにして取り戻すのかという点に向けられていたと言えるだろう。ハイデガーは学問の価値自由という理念に禁欲的に従うことを要求するヴェーバーの立場には満足していなかった。1922年夏学期の講義『存在論と論理学に関するアリストテレスの精選論文集の現象学的解釈』では、「価値評価と事象性というマックス・ヴェーバーの不適切な区分は、哲学に対して重大な損害をもたらした」と明確に述べている(GA62, 331)。

ヴェーバーの学問論との対決という補助線を引くことによって、ハイデガーが「存在への問い」によって目指していたこともより明確になる。つまり、それは学問の本質を「存在」についての知と捉えることによって、学問にその根拠と規範性を与え返そうとする試みだった。まさに「存在への問い」は、その「存在」へのコミットメントにより、価値自由といった立場を許さないものである。このように「存在への問い」は、ヴェーバーの学問論的立場との対決という側面をもっていたと言えるだろう。

### ハイデガーに対する学生の期待

ヴェーバーは1917年の段階で、すでに多くの学生たちを惹きつけていた反主知主義や指導者待望を厳しく批判していた。しかしそのような警告もむなしく、第一次世界大戦後は反主知主義がヴェルサイユ条約の羈絆から脱することを求める愛国主義とも結びついて、学生たちのあいだで大きな影響力をもつようになった。

ハイデガーの名前は『存在と時間』を刊行する前からドイツ中の大学で知られていたと言う。彼のこうした絶大な人気は、彼の思想が今述べたような、学生たちに蔓延する反主知主義的なエートスに訴えかけるものであったことによるのだろう。つまり学生たちはハイデガーを、自分たちが求める「世界観」を与えてくれる指導者として受け止めていたのだろう。

ハイデガー自身もそうした役割を引き受けることを躊躇しなかった。『存在と時間』ではじめて明確な形で打ち出された「存在への問い」というプロジェクトが、西洋的学問をその根本から批判し、それとはまったく異なる知の可能性を示そうとするものだった。そして『存在と時間』刊行後は、まさにそうした知を「存在者全体」についての知——メタ存在論、形而上学——として規定し、それが自然や歴史についての領域的な諸学とはまったく異なる学問であることを強調したのだった。つまりハイデガーの1920年代の思索は

ある意味において、学生たちの反主知主義や自由主義的な諸学問に対する批判に哲学的な基礎を与える試みと解することができる。

ハイデガーが学生たちのあいだである種の崇拜の対象となっていたことを象徴的に示す出来事を紹介したい。1930年にハイデガーがベルリン大学からの招聘を断り、フライブルク大学に残留する決断をした際、数百人の学生が感謝の意を表すために、楽団を伴って夜半、彼のフライブルク郊外の自宅へと松明をもって押しかけ、感謝の意を表したことがあった。この出来事はハイデガー全集第16巻の補遺に当時の新聞記事の採録という形で報告されている。その記事には出来事の経緯とともに、学生代表のハイデガーに対する賛辞、ハイデガーのそれに対する感謝のスピーチの概要が記されている。

その学生代表は、まだ若い学生らしい生硬なスピーチで、ハイデガーに対して今後も自分たちを精神的に鼓舞するよう願っている。ハイデガーは答礼のスピーチで、「客観的で普遍的拘束力をもつ認識や力という支え(Halt)がわれわれにはまったく欠けている」中、「現存在のただ中でおのれを持すること」を求め、それは「戦い」として遂行されると述べている(GA16, 758)。ここにはまさに、このおよそ三年後にハイデガーが学長に就任してから、折に触れて行われた学生たちに対する呼びかけと同じ響きを聞き取ることができるだろう。

## 学生のナチ化

以上で見たように、ハイデガーはヴェーバーが講演「職業としての学問」で憂慮を示していた、学生たちに蔓延していた反主知主義をむしろ積極的に受け止め、それに哲学的な基礎を与えようとした。そのことによって彼は一躍、時代の寵児となったのだった。

ところで、こうした学生たちを規定する反主知主義的な気分は、ナチスが彼らのあいだで広範な支持を獲得する土壌ともなっていた。それゆえナチスは1933年1月に政権を獲得する以前から、ドイツ社会のほかのどの領域よりも早く、大学において成功を収めることができたのだった。この点について、ミヒャエル・グリェットナーは第三帝国時代の大学生に関する詳細な研究において、次のように述べている。

実際のところ国民社会主義者はドイツ社会のいかなる他の領域においても、学生団においてほど、このように急速な、また早期の勝利を収めることはできなかった。五年

の活動ののちにはすでに、国民社会主義ドイツ学生同盟(Nationalsozialistischer Deutscher Studentenbund)はほとんどあらゆる大学で、大学政治上もっとも強い力をもつに至っていた。<sup>5</sup>

ここで学生団と言われているのは、ドイツ学生団(Deutsche Studentenschaft)を指している。これは 1920 年代にドイツの各大学の学生自治会の連合として組織された学生団体である。ドイツの各大学の学生自治会がナチス支持の学生によって支配された結果、このドイツ学生団は 1931 年にはすでに国民社会主義ドイツ学生同盟（1926 年創設）によって掌握されていた<sup>6</sup>。この国民社会主義ドイツ学生同盟の権力掌握に伴って、1932 年 7 月にはドイツ学生団に指導者原理が導入され、学生自治会の連合だったドイツ学生団はその自治的性格を失うことになった<sup>7</sup>。

ナチスは 1933 年 1 月に政権を獲得した。そして 3 月には全権委任法を成立させ、独裁政治の基盤を築いた。その時点では、ナチ党は確固たる大学政策をもち合わせていなかった。このような政策の真空状態に乗じる形で、すでにナチスの政権奪取前に一足早くナチ化されていたドイツ学生団が大学における「強制的同質化」の推進勢力となったのである。グリュットナーはこうした状況をある事典の記述で以下のように簡潔にまとめている。

国民社会主義を信奉する学者の組織は「権力掌握」時にはまだ存在しなかった。この真空を国民社会主義ドイツ学生同盟と同様に国民社会主義者によって支配されたドイツ学生団が利用し、一九三三／三四年には自分たちの力で「国民社会主義的な大学革命」を演出しようと試みたのである。彼らの「反動的で」「硬直化した」教授に対する激しい攻撃により、「権力掌握」期は大学では世代間抗争の性格を帯びることとなったが、これは伝統的なヒエラルキーを一時的に無効とするものだった。<sup>8</sup>

<sup>5</sup> Michael Grüttner, *Studenten im Dritten Reich*, Paderborn, 1995, S. 19.

<sup>6</sup> 田村栄子『若き教養市民層とナチズム』名古屋大学出版会、2002 年、426 頁以下参照。

<sup>7</sup> 同上、427 頁以下。

<sup>8</sup> Michael Grüttner, Wissenschaft, in: Wolfgang Benz, Hermann Graml und Hermann Weiß (Hrsg.), *Enzyklopädie des Nationalsozialismus*, München, 2007, S. 143.



「非ドイツ的精神に抗して」なされた焚書は各大学のドイツ学生団によって主催されたものであった。また学生団は公務員職再建法による免職を例外規定によって免れたユダヤ人教員に対する授業ボイコットを主導し、大学によっては教官人事に影響を及ぼすこともあった。大学執行部と学生団が対立したときには、帝国や各州の官庁は学生団のほうに肩入れしたため、学生たちは自分たちが大学を支配できるという全能感をもち、教授の伝統的権威と大学の自治は広範に無力化されたのである<sup>9</sup>。

学生たちは学問の価値自由という理念を徹底的に否定し、「リベラルな」教授たちを激しく攻撃した。彼らは「学問の自由」を否定し、学問が民族や国家に有用であるという意味で「政治的」であることを求めた。そして大学では「生とは疎遠な」学問に代わって、そうした「役に立つ」学問が教育されるべきだと主張したのである。

フライブルク大学で 1933 年 4 月半ばに就任した新学長は社会民主黨員であったため、ナチスの圧力によりわずか一週間足らずで辞任を余儀なくされた。その後釜として教授たちが白羽の矢を立てたのはハイデガーだった。大学内でナチ党を後ろ盾として荒れ狂う学生たちに困惑した教授たちは、ハイデガーが学生たちのあいだでもつ信望によって、彼らを宥めることを期待したのである。

ハイデガーは大学行政の実務経験をまったくもたなかったため、学長職を引き受けることに迷いもあったのも事実である。しかし 1920 年代から抱懐していた学問論に立脚した大学改革を行う格好のチャンスと捉える気持ちもあり、学長職を受託したのであった。その際、自身が学生に対してそれなりの影響力を行使するという見込みもあっただろう。彼のフライブルク大学への残留を歓迎する学生たちの熱狂を見れば、彼がそう思うのも無理はない。しかしそれが結局のところ、過信でしかなかったことを彼は学長に就任してまもなく思い知らされることになる。

## 新・旧学問論のはざままで

すでに述べたように、もともとハイデガーの哲学は、既存の大学のあり方に対する学生たちの不満に思想的表現を与えるといった側面をもち、それゆえ学生たちのあいだで絶大な人気を博していた。ナチスの政権獲得後、学生たちが大学におけるナチ化の主要な担い手になったとき、ハイデガーは彼らが自分に対してもつ共感に依拠して、自身の学問論を

---

<sup>9</sup> Michael Grüttner, *Studenten im Dritten Reich*, S. 62ff.

大学において貫徹させることを試みたのである。

こうして学長となったハイデガーは、自由主義的な学問を厳しく批判する学生たちに呼応する形で、1933年5月の入学登録式典では次のように述べている。

かつてこの儀式は、いわゆる「大学の自由(akademische Freiheit)」の享受へと参入する瞬間でした。そしてこの自由が意味していたのは、気楽さ、目的や嗜好の恣意性、行いにおける無拘束性でした。／この記念すべき1933年の夏学期をもって、大学の自由というこの概念は決定的にその意義を失いました。この概念は今後、その本来の真理へと差し戻されることになるでしょう。／自由とは何かから自由であること、すなわち拘束や秩序や法則から自由であることではありません。自由とは何かに対して自由であること、すなわちドイツの運命に共同で精神的に献身する覚悟に対して自由であることを意味します。(GA16, 95f.)

ハイデガーはここで、大学に対する国家の影響力を排除するという「大学の自由」という理念が、学問研究の恣意性、無目的性を正当化するものでしかなくなっていることを問題視する。そしてこれからの学問は「ドイツの運命」に対する献身によって拘束されるものでなければならないと宣言する。

問題はわれわれがそれに対して献身することを求められる「ドイツの運命」が何を意味するかである。ハイデガーは友人エリーザベート・ブロッホマン（1892-1972）に宛てた私信（1933年3月30日付け）で、「西洋の歴史におけるドイツ人の使命を見出すことになるのは、ただわれわれがおのれ自身を（……）存在そのものに晒し出すときだけでしょう」と述べている(GA16, 71)。つまり存在こそがドイツ人の使命だというわけだ。そうだとすれば、われわれがそれに対して献身すべきドイツの運命とは結局、「存在そのもの」だということになるだろう。

このようにハイデガーはドイツ学生団の要求に呼応する形で自由主義的な学問観を否定し、学問が「存在」によって拘束されるべきことを説いたのだった。しかしこのことは、ハイデガーが学生たちとまったく同じ立場を取っていたことを意味するわけではない。学生たちは旧来の学問理念に代わるものとして「新しい学問概念」を唱えていたが、それに

対してハイデガーは学長就任演説「ドイツの大学の自己主張」で、次のような苦言を呈している。

もっともわれわれは——「新しい学問概念」について語りながら——あまりに現代的な学問の自立性と無前提性を否定するだけである限り、学問の本質をそのもっとも内在的な必然性において経験することはありません。単に否定するだけで、ここ数十年間を越えて振り返ることのないこうしたふるまいは、まさしく学問の本質を得ようとする真の努力を装うだけのものになります。(GA16, 108)

この新しい学問概念は当時、「政治的学問概念」と呼ばれていたものを指している。これは先ほども説明したように、リベラルな学問理念に反対し、学問に対して民族にとって有用であるというという意味で「政治的」であることを求めるものだった(GA16, 656)。この政治的学問もある意味で、学問の無意味化の克服を目指して、民族への貢献という政治的な目標設定によって学問にその意味を与え返そうとする試みだった。しかしハイデガーから見ると、こうした学問理念はせいぜいこの数十年來、強調されるようになったものでしかない学問の自立性や無前提性の要求を否定するだけで、学問を真に拘束するもの、すなわち存在への洞察は欠いたままであった。

ハイデガーの大学改革の試みは、一方では既存の自由主義的な学問に対する学生たちの反発をその推進力として期待するものだった。しかし他方で、ハイデガーは既存の学問に政治的な目標を付与するものでしかない学生たちの学問論的要求も、近代的学問の本質を根本からくつがえすにはなお不十分なものと見なしていた。それゆえ彼は自身の「存在への問い」に立脚した学問論によって、存在という学問の本質根拠へと立ち返ることを学生たちに求めたのである。このようにハイデガーと学生、それぞれの立場は完全に一致していたわけではなく、両者の関係はある種の緊張をはらんでいた。

## バウムガルテン事件

ハイデガーの「存在への問い」に基づいた学問論は、すでに指摘したように、元來はヴェーバー的な学問観の克服を目指したものだ。こうした彼の立場が 1920 年代におい

て、学生たちの学問の刷新への要求に呼応するものであったことはすでに見たとおりである。彼の学長としての言動や行いはすべて、基本的にはこうした学問論的立場によって裏づけられたものとして解釈できる。たとえば後年になって、ハイデガーの学長時代に行った陰険なふるまいとして非難の的となった、同僚の化学者ヘルマン・シュタウディンガー(1881-1965)の免職を画策した一件や、かつての弟子だったエドゥアルト・バウムガルテン(1898-1982)のキャリアを否定的な所見によって閉ざそうとした一件なども、実は彼の学問論的立場を示したものとして捉えることが可能である<sup>10</sup>。

ここではとくにバウムガルテンの件を取り上げることにしたい。バウムガルテンはヴェーバーのいとこの息子であり、ヴェーバーの死の直前、彼のミュンヘン大学での講義を聴講したこともあった。ヴェーバーの死後、彼はハイデルベルクに移り、1924年にマックス・ヴェーバーの弟アルフレート・ヴェーバーのもとで博士号を取得した。こうした経歴にも見られるように、バウムガルテンはヴェーバー・サークルの一員と見なしうる人物だった。このバウムガルテンに対するハイデガーの態度のうち、ハイデガーの反ヴェーバー的な意識が興味深い仕方で示されることになる。

さて、バウムガルテンはアメリカ合衆国に数年間、留学したのち、1929年から1931年までハイデガーのもとで教授資格の取得を準備していた。バウムガルテンはアメリカ留学中にプラグマティズムを学び、ドイツにおけるもっとも早い時期のプラグマティズムの紹介者でもあった。しかし、そうした哲学的方向性がハイデガーには気に入らなかったようである。両者はまもなく関係を断つことになった。

その後、バウムガルテンはゲッティンゲン大学に移り、そこでアメリカ学の講師を務めていた。1933年にバウムガルテンは突撃隊とナチス大学教官同盟への加入を申請した。ハイデガーはゲッティンゲン大学のナチス大学教官同盟の指導者から、バウムガルテンの学問的能力、ならびに国民社会主義者としての「信頼性」について照会を受けた。ハイデガーはそれに応じて、1933年12月16日付けで所見を送付した。この所見の原本は存在しないが、若干文言の異なる二つの写しが存在する。それらはすでに1930年代から出回っていたが、戦後になってその内容が厳しい非難に晒された。とくに問題となった個所では次のように述べられている。

---

<sup>10</sup> シュタウディンガーとバウムガルテンに対するハイデガーのふるまいについては、拙著『ハイデガーの超 - 政治』の第一章第四節で詳しく論じたので、そちらも参照されたい。

バウムガルテン博士はその血筋からしても、またその知的態度からみても、マックス・ヴェーバーを中心とする自由民主主義的なハイデルベルク・知識人サークルの出です。ここでの彼の滞在期間中、彼は国民社会主義者とは似ても似つかぬものでした。私は彼がゲッティンゲンで私講師をしていると聞き、驚いております、なぜならどのような学問的業績を基にして彼に大学教授資格が許可されたのか、私には想像がつかないからです。バウムガルテンは私のところで挫折したあと、かつてゲッティンゲンで勤務しており、今はもうここを解雇されてしまったユダヤ人フレンケルと、つねに活発に交流していました。私が推測するに、バウムガルテンはこのルートでゲッティンゲンに就職したようで、このことからして、彼の現在のそちらでの人間関係も説明がつくかと存じます。目下のところ私は、彼がナチの突撃隊に入るのは、彼が教官団に入ることと同様に不可能なことと考えています。(GA16, 774、傍点は筆者による。)

「マックス・ヴェーバーを中心とする自由民主主義的なハイデルベルク・知識人サークル」というのは、国民社会主義者がヴェーバーを自由主義者として敵視していたことを前提として述べられている。「ユダヤ人フレンケル」との関係への言及も、バウムガルテンがナチズムとは相いれない存在であることを示唆するものである。

まさにこのハイデルベルクの知識人サークルの一員で、ハイデガーとも 1920 年代初頭から親しく交際していたカール・ヤスパース（1883-1969）は、1935 年にこの写しを読んで大きなショックを受けたとのちに述懐している。ヤスパースは戦後、フライブルク大学の政治浄化委員会の依頼によって執筆したハイデガーについての鑑定書で、ハイデガーの反ユダヤ主義を示す証拠としてこの所見に言及するのである<sup>11</sup>。

この批判によって窮地に追い込まれたハイデガーは、フライブルク大学の政治浄化委員会の委員長に宛てた釈明の手紙で、「ユダヤ人フレンケル」という反ユダヤ主義的な言い回しは「党のジャーゴン」であり、つまり自分の所見の写しとして出回っているものは、自分の所見をもとに党の職員が執筆した所見の写しでしかないと釈明した(GA16, 417f.)。

---

<sup>11</sup> フーゴ・オット『マルティン・ハイデガー 伝記への途上で』北川東子、藤沢賢一郎、忽那敬三訳、未来社、489 頁以下。

この釈明が真実かどうかは別として、彼がバウムガルテンの「マックス・ヴェーバーを中心とする自由民主主義的なハイデルベルク・知識人サークル」からの出自を国民社会主義者であるにはふさわしくないバックグラウンドとして指摘したことは、彼のヴェーバーに対する反感を念頭に置けば、あってもおかしくないことだと思われる。

ハイデガーの所見は当初、それなりの効果をもたらした。ゲッティンゲン大学のナチス教官同盟はバウムガルテンの教授資格審査の申請を受け付けず、アメリカ学の講師任期の延長も認めなかった（ハイデガーは所見で、バウムガルテンが教授資格をすでに得ていたかのように記しているが、それは誤りである）。

バウムガルテンのナチス体制下での運命が好転したのは、ニーチェ研究で知られ、ローゼンベルク機関の学術局長を務めていたアルフレート・ボイムラー（1887-1968）の知己を得てからだ。彼の後押しもあり、バウムガルテンは 1936 年にゲッティンゲン大学で教授資格を取得し、1937 年に同大学の私講師となることができた<sup>12</sup>。彼はさらに 1937 年にナチ党に入党、1940 年にはケーニヒスベルク大学の正教授に招聘され<sup>13</sup>、ここでは哲学研究室の主任も務めた。

この一件は通常、ハイデガーが体制派の学長という立場を利用して、自分と仲違いしたかつての教え子のキャリアを破壊しようとした陰險な所業として描き出されている。バウムガルテンはこの件については、ハイデガーの策動の被害者として同情的に捉えられるのである。しかしこのとき誰も問題にせず、完全に盲点になっているのは、元来「自由民主主義的な知識人サークル」に属していたはずのバウムガルテンが、ナチスが権力を奪取して早々に、ナチスに迎合しようとしていること、しかもその試みは見事に功を奏し、彼はナチス体制下でトントン拍子に出世を遂げたことである<sup>14</sup>。

---

<sup>12</sup> Hans-Joachim Dahms, *Aufstieg und Ende der Lebensphilosophie: Das philosophische Seminar der Universität Göttingen zwischen 1917 und 1950*, in: Heinrich Becker, Hans-Joachim Dahms, Cornelia Wegler (Hrsg.), *Die Universität Göttingen unter dem Nationalsozialismus*, München, 1998, S. 301.

<sup>13</sup> バウムガルテンのケーニヒスベルク大学への招聘については以下を参照。Christian Tilitzki, *Die deutsche Universitätsphilosophie in der Weimarer Republik und im Dritten Reich* Teil 2, Berlin, 2002, S. 793f.

<sup>14</sup> なお戦後においても、教職停止という処分を受けたハイデガーとは対照的に、バウムガルテンはほとんど無傷で生き延びた。彼は戦争終結後、まずはフライブルク大学の社会学客員教授を務めたあと、一九五七年にはマンハイム商科大学の正教授に就任し、そこで一九六三年に定年を迎えている。彼は戦後、マックス・ヴェーバーに関する著作を多く残し、ヴェーバーの紹介者として大きな功績を残したのだった。Dirk Kaesler, *Die Zeit der Außenseiter in der deutschen Soziologie*, in: Karl-Ludwig Ay, Knut Borschardt (Hrsg.), *Das Faszinosum Max Weber. Die Geschichte seiner Geltung*, Konstanz, 2006, S. 172.

## ドイツ学生団に対する失望

ハイデガーはドイツ学生団という若い力が、自分の提示した本来的な知の担い手になることを期待していた。もともと彼はかなり早い時期から大学のあり方には問題意識をもち、その改革に強い関心をもっていた。その彼にはナチス政権奪取後に大学を席卷したドイツ学生団の変革への要求は、大学の旧来の秩序を転換する大きなチャンスと映ったのである。このドイツ学生団は基本的に反主知主義的な性向をもち、イデオロギー的には人種主義に基づいた反ユダヤ主義によって規定されていた。そのためハイデガーは学生団を建設的な勢力へと変貌させるために、人種主義という非精神的な基盤に代わる精神的な基盤を与えるを試みたのである。ハイデガーが学長就任演説において、労働奉仕や国防奉仕に対して「知の奉仕」の重要性を強調するのはこのような事情が背景にあった。

今も述べたように、ハイデガーの大学改革は学生を自身の構想によって教化できるかどうかにかかっていた。学長就任演説をはじめとする大学の諸行事での演説、講演、さらには講義も、まさに学生を教化しようとする彼の努力を示している。それ以外にハイデガーが学生の教育の場として大きな力を注いだのが、選抜された学生、さらには若手教官を対象とした学術キャンプであった。

しかしハイデガーは学長就任後、まもなく学生の教化がうまくいかないことをこぼしている。学長期の前半に執筆された「黒いノート」のいくつかの覚書に、すでに学生たちに対する苛立ちと失望がはっきりと示されている。1933年夏学期の段階で、彼はドイツ学生団に対して次のような辛辣な批評を加えている。

学生団が今、この夏学期の始まりに到るまでに示したことすべてから、次の結論を導かざるをえない。つまり学生団はまったく無能だということである——新たな建設においてはじめてそうだというのでなく、すでに大学内部の革命において無能である。／完全な精神的な未熟さはいかに多くの勇気や熱狂によっても代替できない。

(GA94, 116)

ドイツ学生団が何かを建設する力をもたないという苦情は、「省慮と目配せ III」ではそ

の後も繰り返されている。「現状について（1934年2月終わり）」と題された覚書105では、次のように述べられている。「有能で、頼りになる、地に足のついた人材は若者たちのあいだには存在するが、学生団にはいない。なぜならば、学生団は今自分たちに委ねられた大学の世界に建設的にではなく、単に論争的にしか『対処できない』からである」（GA94, 157）。さらに覚書110でも、学生団は「将来の精神的世界を建設すること」は決してできない、なぜならば「学生団は本質に即して、精神的 - 世界観的で創造的な成熟の年代には達していないからだ」と言われている（GA94, 159）。要するに学生団は十分に「精神的」でないため、ドイツの大学にとって何ら建設的で積極的な力になりえないというわけだ。

こうしてハイデガーはすでに1933年の終わり頃には、ドイツの大学には「自己主張」が不可能であることを認めざるをえなかった。すなわち覚書101で、彼は「終わりつつある、学長在任の年の本質的な経験」について次のように語っている。その経験とは「真の『自己主張』に対する無力に由来する、大学のとどめがたい終わりである。自己主張は最後の、何の反響もなく消え去りつつある要求であり続けている」（GA94, 154）。

ここからハイデガーは自身の学長職について、次のように総括する。「私の参画の時期はあまりに早すぎた、ないしより正確には、まったく無駄だった」。そして彼は自嘲気味に次のように述べている。「時代に適った『指導』は内的な変貌と自己教化を目指すべきではない——そうではなく、新たな諸施策の、できる限り目に見える積み重ね、ないしは既存のもの印象深い変更を目指すべきなのだ。しかしこうしたふるまいによっては、本質的なものは古いものところにとどまることしかできない」（GA94, 155）。つまりナチス政権下で求められているのはしよせん「新たな諸施策の目に見える積み重ね」でしかなく、そこで自分のように「内的な変貌と自己教化」を目指すことはまったく無意味だったと言っているのである。

## 学長辞任

ハイデガーは1934年4月、学長に就任してからわずか一年足らずで職を辞した。このことについて、「省慮と目配せ III」の覚書113で、彼は苦々しく次のように述べている。「学長職の終わり。1934年4月28日。——私は辞職した。なぜなら責任を負うことはもはや不可能だからである。／凡庸さと喧騒、方歳！」（GA94, 162）。こうしてナチスの「精神



的」指導を目指したハイデガーの学長としての試みは挫折に終わった。

ハイデガーは自分が学長を辞任した直接的なきっかけとして、後年の説明では、学長の権限で指名した法学部長の更迭をバーデン州文部省から迫られたことを挙げている。しかしこの出来事がなかったとしても、彼は早晩、学長から退かざるをえなかっただろう。というのも先ほども見たように、すでに 1933 年の終わり頃には、彼は大学運営が行き詰まっていることを明確に認識していたからである。彼が学長就任後、早い段階でドイツ学生団の無能さに失望していたことはすでに見たとおりである。彼の大学改革の成算は学生団が学問の本質に目覚め、自身の改革の推進力になるかどうかにかかっていた。したがってその学生団が自分の期待どおりに動かないとき、彼の大学改革は頓挫せざるをえないのである。

もちろんハイデガーは同僚の正教授たちの協力を得ることもできなかった。そもそも今も述べたように、ハイデガーの学長としての基本的な姿勢が、ドイツ学生団の変革への要求の力を借りて、守旧的な同僚の抵抗を排除しようとするものだった以上、同僚と対立関係に陥ることは不可避だった。彼は学長に就任してから評議会をしばらく開かなかったため同僚教授たちから不満が噴出し、前任の学長フォン・メンドルフの注意でようやく 6 月に開催するありさまだった。

また教授陣はドイツ学生団が要求する労働奉仕や国防スポーツの導入に対しても、大学の授業を妨げるという理由で消極的だったが、ハイデガーはむしろ学生団の意向に寄り添う姿勢を見せたため、これも同僚の不興を買った。また 8 月にバーデン州で施行された大学条例は大学に指導者原理を導入するものであり、正教授たちから大学運営の権限を奪うものであったため、同僚はそれを大学自治の破壊と見なし、両者の対立は決定的なものとなった<sup>15</sup>。

このように一方で期待をかけていた学生や若手教官を思うように教化できず、他方で同

---

<sup>15</sup> ハイデガーの前の前の学長だったヨーゼフ・ザウアーの日記によると、学長就任式がまだ済んでいない 5 月中旬の段階で、ハイデガーが評議会に諮ることなく独裁的に大学運営を行っていることに対する不満をザウアーも含めた同僚が抱いていたことがわかる。8 月にはハイデガーが国防スポーツの実施に大学教員が協力的ではないことを学生たちの前で貶したことが同僚の不興を買ったことが記されている。ハイデガーが同僚の信頼を失うにあたって決定的だったのは、ハイデガーがバーデン州文部省と協議の上、8 月に施行された大学条例の変更であった。これにより大学における指導者原理が強化され、学長が学部長を直接指名できるようになったが、自分たちの選んだ人物によって「大学の終わり」がもたらされるのは皮肉なことだとザウアーは嘆いている。(Heidegger und Nationalsozialismus, Heidegger-Jahrbuch 4, S. 232f.)

僚からは徹底的に反感を買ったハイデガーが大学運営に行き詰まるのは事の必然だった。

## 加担から批判へ

ハイデガーは学長に就任するとき、学問の本質をめぐる自身の立場が、学問の専門化に身を委ねる大学の旧来の体制とドイツ学生団の政治的学問という学問理念のどちらとも相入れないことは明瞭に意識していた<sup>16</sup>。大学における学問の現状について、彼がすでに学長就任前から問題視していたことは、先ほども述べたとおりである<sup>17</sup>。まさに 1920 年代の終わりごろからハイデガーが講義などで論じるようになる、存在者全体を開示する形而上学という構想は、こうした細分化された領域を扱う専門主義的な学問に対抗しようとするものだった。

他方でハイデガーが大学改革の推進力となることを期待したドイツ学生団も、彼らなりの学問理念をまったくもたなかったわけではなかった。むしろすでに述べたように、学生団は「新しい学問」、すなわち政治的学問を唱えていた。これは「学問の自由」を標榜する自由主義的な学問理念を否定して、学問が民族、国家にとって有用であらねばならないこと、そうした意味でそれらによって拘束されることを主張するものだった。

ハイデガーは学生たちが民族から遊離した教授たちを批判することには一定の正当性を認めていた。しかしその際、従来 of 学問に対して民族や国家のためという目的を単に付与するだけでは近代的学問の本質を変えられないと考えていた。しかも彼ら自身はそのことによりニヒリズムを克服したと思い込んでしまうため、既存の体制をかえって無自覚のまま温存することになり、その意味で反動的だと見なしていた。このようなドイツ学生団の反動性について、ハイデガーはすでに学長在任中の 1933/34 年冬学期講義『真理の本質について』でも次のように批判している。

---

<sup>16</sup> ハイデガーはこの点について、戦後の釈明「学長職 1933/34 事実と思想」で次のように述べている。「私に最後の日まで、学長職を引き受けることをためらわせていたのは、私が必然的に自分自身の企図によって、「新しいもの」と「古いもの」に対する二重の対立に陥るだろうという認識でした。「新しいもの」はそうこうするうちに、「政治的学問」という姿を取って現れてきましたが、この理念は真理の本質を歪曲することに基づいています。「古いもの」は、以下のような努力でした。すなわち「専門」にとどまり、その専門の進歩を促進し、それを教育において利用できるものにする努力、本質的基礎に対するいかなる省察も抽象的 - 哲学的だとして拒否するか、せいぜいのところ単に外面的な飾りとして許容するだけで、しかし省察を省察として遂行し、この遂行に基づいて思索し、大学に帰属することはしない、そうした努力です」(GA16, 373f.)。

<sup>17</sup> 前注で触れた「学長職 1933/34 事実と思想」において、ハイデガーは本発表ですでに引用した教授就任講演「形而上学とは何か」における学問の細分化、専門化を批判する一節を自身の学長職受託の動機を示すものとして参照を促している(GA16, 372)。

嘆かわしいことに、自由主義が論駁されるべきであることを発見したと思いついでいる輩がますます増えている。たしかに自由主義は克服されるべきである。しかしそれは自由主義がなお揺らいでいない大きな現実のきわめて弱い、また最後の付随現象でしかないことが理解されたときだけである。そして自由主義の熱狂的な殺害者がただちに自由主義的な国民社会主義のいわゆる「代理人」としてあらわになるという危険が存在する。この自由主義的な国民社会主義は無意味さと素朴さと若気の至りにやたらと満ちあふれている。(GA36/37, 119)

ここで「若気の至り」と言われていることにも示されているように、ハイデガーは明らかに学生団を揶揄しているのである。自由主義は「大きな現実」、すなわち存在忘却の帰結である。自由主義がそうした真の起源にまでさかのぼって克服されない限り、存在から切り離されていることに由来する知の恣意性は克服されず、その意味で自由主義にとどまったままであると言うわけだ。

ハイデガーは学長としての自身の指導によって、ドイツ学生団がその政治的学問から脱却し、学問の真の本質に目覚めることを期待していた。しかしそうしたドイツ学生団の教化が失敗に終わったことは、彼らが政治的学問という学問理念にとどまり続けることを意味する。それゆえ彼は学長辞任後、ナチスが変革を唱えつつ、実際のところ、旧来の学問観にとどまっているという反動性を強調し、その点を厳しく批判するようになるのである。

1934/35 年冬学期講義『ヘルダーリンの賛歌『ゲルマーニエン』と『ライン』』において、ハイデガーはギリシア人によって開示された根源的な自然が最初はキリスト教、それに次いで近代的学問によって「非自然化された」ことを指摘する。この近代的学問は「自然を世界交通や産業化、ならびに特別な意味において機械化された技術の数学的秩序の勢力圏へと解体してしまった」。そして今日の「知の獲得と伝達の組織化された事業としての学問」もこうした出来事の帰結である。このように述べたあとで、ハイデガーはナチスの「新しい学問」を次のようにこきおろす。

こうした事業がいわゆる自由主義的な客観性といった態度において維持されるのか、

それともこうした態度を単に否認するという態度において維持されるのかは、今日の学問それ自体の形態を変えるものではない。この自称、新しい学問とやらが新しいのは、ただ自分がいかに古くさいものかを知らないことによってでしかない。この新しい学問は国民社会主義の内的真理とはまったく何の関係もない。(GA39, 195)<sup>18</sup>

ここでは「新しい学問」は、それが克服すると称している「古い学問」と異なる本質をもつものではないというハイデガーの立場が明確に示されている。その古い学問とは、キリスト教と近代的学問という二重の力によって、ギリシア人が開示したような根源的な自然（ピュシス）から切り離された「知の獲得と伝達の組織化された事業としての学問」を指している。こうした近代的学問の体制を克服し、根源的な自然の開示という学問の原初の本質を取り戻すことは、「新しい学問」のように学問の自由を否定し、学問に民族への貢献といった目標設定を新たに課すだけでは実現されえないのだ。ここではこの「新しい学問」は「国民社会主義の内的真理」と何の関係もないと述べられているが、このとき国民社会主義の内的真理として彼が念頭に置いているのは、自分が真の学問と見なすもの、すなわち存在者全体（ピュシス）を開示する形而上学であろう<sup>19</sup>。

---

<sup>18</sup> この「国民社会主義の内的真理」という一節は、この講義の全集版の編集では「自然科学の内的真理」となっている。しかしマールバッハのドイツ文学アーカイブに収蔵されている底本の講義草稿を見ると、「自然科学(Naturwissenschaft)」として本文確定された箇所は“N. soz”という略号が記されており、これは国民社会主義(Nationalsozialismus)の略記なので、当該箇所は「国民社会主義の内的真理」と読むべきだという指摘がアメリカのハイデガー研究者ジュリア・アイアランドによってなされた。彼女はこの「国民社会主義の内的真理」を「ピュシスの生起」として捉えることを提唱している (Julia A. Ireland, Naming Φύσις and the “Inner Truth of National Socialism”: A New Archival Discovery, in: *Research in Phenomenology* 44, 2014, pp. 315-346)。この読みは1935年夏学期講義『形而上学入門』に見られる「この運動の内的真理と偉大さ」という表現に呼応しており、基本的に妥当なものと考えられる（次注も参照）。

<sup>19</sup> 1935年夏学期講義『形而上学入門』においても「この運動の内的真理と偉大さ」という表現が見いだされ、この講義が1953年に単行本として刊行されて以来、ナチス賛美ということとずっと非難され続けてきた。一節全体をここで引いておこう。「今日すっかり国民社会主義の哲学としてあちこちで喧伝されているが、この運動の内的真理と偉大さとは（すなわち惑星的に規定された技術と近代の人間の出会いとは）何の関係もない代物は『価値』や『全体性』というこの濁った水たまりの中で網を打っているのである」(GA40, 208)。丸括弧内の注記は講義草稿には記されていないという証言があり、しかも講義草稿のこのページはなぜか消失してしまっていることから、この注記があとから付け加えられたものではないかという疑惑が取りざたされてきた。しかし本書で見たような、ナチズムの教義に対するハイデガーの批判的姿勢からすれば、この箇所もまさに「国民社会主義の哲学」なるものの反動性を批判していることは明らかだ。つまりそうしたものは自分が示しているような「国民社会主義の内的真理」を捉えられていないと言うのである。したがってあえて丸括弧内の注記を付さなくても、この箇所は十分にナチズム批判として解することができる。丸括弧の内容はナチズムを近代技術の体現者と捉えるものだが、こうした認識は1935年よりややあとの1930年代終わりに確立される見方であり、あ

## 自由主義的学問と民族的学問の相互依存

以上で見たような、ハイデガーが嘆いたドイツ学生団の知的浅薄さこそ、マックス・ヴェーバーがすでに十数年前に見て取っていたものであろう。つまりハイデガーの学長職の顛末は結果的に、安易な指導者気取りを戒めるヴェーバーの警告の正しさを示すことになった。そうだとすると、やはりヴェーバーが勧告していたように「自分の仕事に就き、日々の要求に従う」こと<sup>20</sup>、すなわち自由主義的な学問理念に禁欲的にとどまるのが学生たちにとっても、ハイデガーにとっても望ましい態度だったということになるのだろうか。

しかし事情はそれほど単純ではない。ヴェーバー自身が講演「職業としての学問」で、今日の学問が「世界の意味」についての回答を与えるものではなく、そうした意味で「無意味」なものであることを認めていた<sup>21</sup>。そしてドイツ学生団が学問に政治的意味を付与しようとするとき、それは今述べたような学問の無意味さ、空虚さを克服するという動機に発していた。そうだとすると、そうした政治的学問もある意味で自由主義的な学問の本質的な無意味さが生み出したものであり、つまり自由主義的学問の鬼子と言えるのではないか。

すでに上で見たように、ハイデガーは学長在任中から辞任後のある時期までは、ドイツ学生団の政治的学問がその学問の本質の捉え方については、自由主義的学問とまったく異なる点の問題視していた。しかし 1930 年代後半になると、彼は自由主義的な学問と政治的に方向づけられた学問が近代的学問として単に同じ本質をもつだけでなく、近代的学問は自由主義的であるからこそ、任意の政治的目的設定も可能となることを強調するようになる。ハイデガーはたとえば『哲学への寄与論稿』において、「ただ徹底して近代的な（すなわち『自由主義的な』）学問といったものだけが、『民族的学問』でありうる」（GA65, 148）と指摘したうえで、次のように述べている。

---

とから挿入した可能性は高い。ハイデガーがその注記を加えたのは、自分が想定する「真のナチズム」に照らして現実のナチズムを皮肉るという議論の屈折が戦後の読者には理解されず、ここが額面通りのナチズム賛美と受け取られることを避けるためだったと推測される。

<sup>20</sup> マックス・ヴェーバー『職業としての学問』尾高邦雄訳、岩波文庫、1993年、74頁。

<sup>21</sup> マックス・ヴェーバー『職業としての学問』、40頁以下。

ただ近代的学問のみが、事柄に対する手続きの優位と存在者の真理に対する判断の正当性の優位に基づいて、異なった目的への、つねに必要なに応じて調整可能な切り替えを許すのである（ボルシェヴィズムにおける決定的な唯物主義と技術主義の貫徹、四カ年計画における動員、政治的教育への利用）。「いわゆる」学問は、ここではいたるところで同じものであり、それはまさにこうした異なった目標設定によって、根本においてつねにより一様となり、すなわち「より国際的に」なっていく。（GA65, 148f.）

近代的学問は「存在者の真理」（つまり存在者の存在）によって拘束されることなく、それぞれの学問分野に固有の手続きを存在者に適用し、そのことによって存在者に関する「判断の正当性」を獲得することに基づいている。このような近代的学問の自由主義的本質によって、学問はそのつど異なった目的に柔軟に対応することも可能になると言うわけだ。それゆえ上の引用でも示唆されているように、学問はボルシェヴィズムにも、ナチズム（四カ年計画はナチス・ドイツのプロジェクト）にも完全に適応することができるのである。ボルシェヴィズムはロシア共産主義を意味するが、ナチスの徹底した反ボルシェヴィズム的立場を前提としたとき、これがナチスに対する辛辣な皮肉であることがわかるだろう。

しかも自由主義的な学問は、単に任意の政治的目的設定を可能にするというだけではない。自由主義的な学問はそのつど新たな目標設定から「刺激」を受け、そのことによっておのれの存在意義に対する懐疑から逃れられるという意味で、そのような目標設定を本質的に必要としさえする、こうハイデガーは指摘する。

「学問」は〔本来的な意味での〕知ではなく、説明領域の正当性を設定することであるから、「学問」はまた必然的に、そのつど新たな目標設定から、ただちに新たな「刺激」を受けるのであって、そうした刺激の助けによって、「学問」は同時に、あらゆる可能な脅威（すなわちあらゆる本質的な脅威）から逃れ、更新された「落ち着き」のうちで、さらに研究を進めていくことができるのである。こうして今や、「学問」が次のことを自覚するまでには、そう何年も時間は必要としないであろう。すなわち、その「自由主義的な」本質とその「客観性の理念」は、政治的・民族的「方向

付け」とうまく両立するだけでなく、そうした方向付けにとって不可欠でもあるということである。そしてそれゆえ、今や「学問」の側からも「世界観」の側からも一致して、学問の「危機」といったことについて語るのは、実際単なるおしゃべりにすぎないということが認められねばならないのである。（GA65,149、〔 〕内は筆者の補足）

近代的学問の自由主義的本質こそ、政治的学問の可能性の条件である。そして自由主義的学問は自身の有意義性を確信するために、つねに政治的な方向付けを必要とする。こうした自由主義的学問と民族的な学問の結託について語るとき、ハイデガーは自由主義的な学者たちが結局はナチス体制へと順応していったことを念頭に置いている。バウムガルテンのようにヴェーバーの直接の影響下にあった学者やシュタウディンガーのようにもともと平和主義者として知られていた化学者でさえも、政治的学問にまったく免疫をもたず、むしろ率先してそれに追随していったことに、ハイデガーは強い印象を受けたのだろう<sup>22</sup>。そして先ほどの引用の末尾でも暗示されていたように、ハイデガーはまさにこうした古い学問と新しい学問の密かな結託のうちに、自分の学長職が失敗した理由を見て取るのである。その点について、彼は 1937 年夏学期講義『西洋的思索におけるニーチェの形而上学的根本位置』では次のようにはっきりと述べている。

かつて以前に、学問がおのれの本質を主張できるのは、学問が根源的に問うことに基づいてその本質をふたたび獲得することによってのみである、ということに気まぐれに言いだした者がいたが、その者はこのような状況においては、必然的に「学問」の道化か破壊者にしか見えない。というのも、諸根拠を問うことはやはり内的な柔弱化をもたらすのだし、こうした企てに対して、「ニヒリズム」という効果的な呼び名も取りおかれているからである。しかしこの妖怪も過ぎ去った、ひとは平穏さを得て、

<sup>22</sup> 実はヴェーバーも、ある目的が与えられた場合、手段がどの程度その目的に適しているかという問いに答えることを科学的考察の対象として認めている（マックス・ヴェーバー『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』富永祐治、立野保男訳、折原浩補訳、岩波文庫、1998年、31頁）。そうだとすると、ヴェーバーの立場と「政治的学問」のあいだに実はそれほど大きな隔たりはないことになる。ハイデガーはまさにこの点を見て取り、「自由主義的学問」と「民族的学問」は対立するものではなく、むしろ両立可能であることを指摘するわけである。

学生もふたたび勉強する気を取り戻した、というわけである。精神の全面的な小市民的活動をふたたび始めることができる。(GA44, 109)

ここで言われている「道化」、「破壊者」はもちろんハイデガー自身のことを指す。学問の自由を真に脅かすのは、外部からの政治的要請ではなく、むしろ学問そのものの本質を問う哲学的省察である。それゆえに、そうした省察は自由主義的学問と政治的学問という新旧両方の立場から封殺されたと言うのである。

### 終わりに

以上の議論にも見られるように、ハイデガーは 1930 年代後半になると、近代的学問の本質をめぐる主題的な考察を展開するようになる。こうした近代的学問についての考察は、のちに彼自身によって「学問への省察」と呼ばれるようになる。この学問への省察は、上で見た内容にも示されているように、自分の学長職を失敗させたものが何であったかの反省という性格をもっていた。

ハイデガーはナチス加担に失敗したのち、そのことに対する反省に基づいて自身の哲学的思想を変化させたことがしばしば指摘される。1936 年ごろに起こったとされる俗に言うところの「転回」が、こうした自身のナチス加担に対する反省と結びつけられるのである。ここではこのような解釈の正否を検討することはしない。ただ同時期の彼の思索の変化について、本稿のこれまでの議論に即して言えることは、ハイデガーはナチス加担をとおして、自身に対する対抗運動をも勢力伸張の糧にしてしまう近代的学問の支配の強固さをまざまざと認識し、それを学問への省察へと昇華させていったということである。つまり彼は学長職の経験をとおして、近代的学問、ひいては近代形而上学の本性についての洞察を飛躍的に深めたことが確認できる。

ハイデガーの「学問への省察」の所見によれば、自由主義的学問は政治的学問に対して免疫をもたず、むしろおのれ自身の意味を求めて積極的に追随しようとする。また政治的学問は自由主義的学問に避難場所を用意することで、自由主義的学問に対する表向き批判とは裏腹に、むしろその延命をもたらしてしまう。「学問の自由」というスローガンが国家権力に対する護符になると信じている人々は、今一度、こうしたハイデガーの主張を検討すべきではないだろうか。また巷のハイデガー・ナチズム論が自由主義／全体主義と



いう二項対立図式を前提としつつ、自由主義の擁護者としての立場からハイデガーを全体主義の側に位置づけて批判するとき、そうした挙措そのものが全体主義に対する免疫の欠如を示していることにならないかについても、われわれはよくよく反省してみる必要があるだろう。

本研究は JSPS 科研費 21K00023 の助成を受けたものである。